

早いもので12月も下旬になり、いよいよ成年の足音が聞こえてきました。
来る年が皆様にとって良い年でありますように ☆。.:*・
現在会員登録数 2,540 人さま。次号は新年 1 月 20 日発行の予定です☆

☆。.:*・。★。.:*・。☆。.: 目次 *・。☆。.:*・。★。.:*・。

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》読書活動ボランティアのためのワンポイント 88

《4》行って来ました！

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

☆。.:*・。★。.:*・。☆。.: *・。★。.:*・。☆。.:*・。★。。

■
【1】お知らせ ☆

● 「日産 童話と絵本のグランプリ」受賞作品が出版されました

当財団主催「第33回 日産 童話と絵本のグランプリ」（平成28年度実施）の大賞2作品が、BL出版より出版されました。

『こめとぎゆうれいのよねこさん』えばたえり／作 童話部門大賞作品

小林ゆたか／絵（第28回絵本部門優秀賞受賞者）

『ぎゅっ』ミフサマ／作・絵 絵本部門大賞作品

詳細、表紙写真はこちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/07_com-con/02_nissan/index.html

● 年末年始休業日のお知らせ

当財団の業務は、12月28日（木）から1月4日（木）まで休業とさせていただきます。ご了解ください。

通常の業務日は、火曜日～土曜日午前9時～午後5時30分

休業日は、毎週日曜日・月曜日、祝休日、年末年始ほかとなっています。

● Twitter はじめました

当財団公式 Twitter をはじめました。いろいろな情報を発信しています。

フォローしてください。 → https://twitter.com/IICLO_News

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いいたします。

お申し込み、詳細は → <http://www.iiclo.or.jp/donation.html>

【2】コラム ☆

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Satoko's Talk

『パンツ・プロジェクト』 キャット・クラーク/著 三辺律子/訳

あすなろ書房 2017年10月

対象年齢：小学校高学年以上

あらすじ：12歳のリヴは体は女子でも心は男子であることを自覚しているが、誰にも話すことができない。中学生になって制服のスカートをはくのがどうしても嫌で、校長先生に相談に行くが一蹴されてしまう。学校では、ジェイドという人気者の女子に「おとこ・おんな」と言われたり、レズビアンである二人の母親がいることで執拗ないじめを受けるが、隣の席のジェイコブが学校でズボンをはけるための「パンツ・プロジェクト」を応援してくれる。

Y：LGBTをテーマにした新しい作品が翻訳されました。

S：リヴが女子だと見られることに違和感を覚えて自分がトランスジェンダーだと理解する過程や、家族や友だちに打ち明けるべきか葛藤する心理の描き方にリアリティを感じました。

Y：オリヴィアという名前にも、「女の子」「娘さん」などの言葉にも敏感に反応して抵抗を感じるという具体的な描写が日常的に苦しい思いにさいなまれていることを読者に想像させます。

S：重くなりがちなテーマですが、リヴの一人称で書かれ、そのリヴが前向きに行動していくところがさわやかで、読んでいて元気になれます。

Y：リヴの家族があたたかいことが理由かもしれませんが。保護者は「母さん」とイタリア人の「マンマ」というレズビアンのカップルで、お互いが愛し合い、子どもについても見守りながらも一人の人間として尊重しています。二人の母親がいることの幸せがリヴからも弟からも伝わってきます。

S：そういうリヴがクラスでいじめられているマリオンとは距離を取ろうとし、マリオンからのパンツ・プロジェクトへの支援の申し出を断ることも描かれます。

Y：この作品のおもしろさの一つはここにあると思いました。つまり、偏見は誰もが持ち得るということが書かれ、偏見とは何かを考えさせる作品になっていると思ったのです。

S：リヴは自分がいじめられないようにレズビアンのお母さんに学校に来て欲しくないと思ったりもします。また、リヴを応援するジェイコブも人に隠している秘密があることが明らかになります。

Y：いじめの辛辣さも印象深く、リアリティがありました。

S：そんな中で、最後にマンマがリヴに語る「幸せになるのにいちばん大切なのは、自分のあるがままの姿を受け入れること」という言葉が心に残りました。

* 今回のゲストは当財団特別専門員の小松聡子さん（S）です。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第 28 回「シグナルとシグナレス」

身分ちがいの恋、あるいは、古風な喜劇

「これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。」——これは、童話集『注文の多い料理店』の序の一節です。前回までの「月夜のでんしんばしら」（本メルマガ NO. 86, 87、第 26, 27 回参照）につづいて、今回も、鉄道線路のおはなしです。

「signal」は英和辞典にのっていますが、「signaless」はのっていません。「シグナル signal」に女性形接尾辞「-ess」を付けた造語。」とは、新潮文庫版『新編 銀河鉄道の夜』の注解です。それでも、signaless ということばが発明されたとき、この物語が生まれたにちがいありません。軽便鉄道の一番列車が到着して、シグナレスは、「かたん」と白い腕木をあげます。

〈シグナレスはほっと小さなため息をついて空を見上げました。そらにはうすい雲が縞になっていっぱいになり、それはつめたい白光、凍った地面に降らせながら、しずかに東へ流れていたのです。〉

いきなり「カタン」と音がして（シグナレスはひらがなののに、こちらはカタカナです）、シグナレスが急いで振り向くと、本線の立派なシグナルが「お早う今朝は暖ですね。」とあいさつします。「お早うございます」と、シグナレスは、「ふし目になって声を落として」こたえます。そこへ割り込むのが本線のシグナルに電気を送る太い電信柱です。——「若さま、いけません。これからはあんなものに矢鱈に声をおかけなさないようにねがいます。」太い電信柱は、本線のシグナルの後見人で、鉄道長の甥だといひます。

本線のシグナルと軽便鉄道のシグナレスの仲は、身分ちがいの恋です。賢治の恋愛体験を引き合いにする論者もいますが、作中のふたりの台詞もしぐさも、じゃまをする電信柱の存在も、まるで古風な喜劇を見るようです。劇のなかでは、風がふたりの仲を取りもったり、大事な結婚の約束をもらして電信柱をひどく怒らせたりもするのです。「ガタンコガタンコ、シューフッフッ、／さそりの赤眼が 見たころ、／四時から今朝も やってきた。……」という一番列車の歌からはじまる「シグナルとシグナレス」は、歌劇といってもいいでしょう。（馬車別当）

（本文の引用は、新潮文庫版『新編 銀河鉄道の夜』によりました。）

《3》 読書活動ボランティアのためのワンポイント 88

その 11 さまざまなご質問にお答えします (6) おはなし会について

質問：おはなし会で選んだ本やおはなしについて、子どもから「知ってるー」と言われたらどうしたらいいですか。

読もうとした本や語ろうとしたおはなしを「知ってるー」という反応はよくあります。「あ、残念」などと言うと、場がしらけます。子どもはおもしろ

い物語であれば、何度も楽しめますので、そのことは決して残念なことではないはずです。

「知ってるー」と言うのは、知っていることを認めて欲しいという気持ちの子供が多いので、まずは、「すごいねえ」「ほんとう」などと、そのことを受け止めます。それから、「同じお話か聞いてみてね。」「前と同じ気持ちになるか聞いてみてね」など、再度同じ物語を楽しむ動機付けを行います。

また、読む/語る前にストーリーを語ろうとする子どもに対しては「他の人には秘密にしてね」など、読み/語り手と知っている子どもだけの「秘密」を楽しむという姿勢を示すと、すばらしい聞き手となって読み/語り手を応援してくれます。

最初は知っている物語はつまらないという先入観を思って聞いている子どもも、物語がおもしろければ、知らない間に物語世界に引き込まれ、集中している姿をよく見かけます。そうなるためには、何度聞いてもおもしろいと思える、つまり、聞き手によっていろいろな解釈を可能とするおはなしや絵本を選ぶことが大切なのです。

* 次号は「その 11 さまざまなご質問にお答えします (7)」の予定です。
ぜひ、ご質問やご意見をお待ちしております。(Y)

《4》 行って来ました！

美術館「えき」KYOTOで12月25日まで開催されている「連載40周年記念 ガラスの仮面展」に行ってきました。

『ガラスの仮面』（美内すずえ著）は1976年から雑誌「花とゆめ」に連載が開始され、現在、単行本で49巻まで出版されている、まだ完結していない、演劇を題材にしたマンガです。この展覧会では、原画やカラーイラスト、小中学生時代の手描きのノートなど約300点が展示されています。

会場入り口には、愛読者にはおなじみの「北島マヤ様 あなたのファンより」というメッセージ付の豪華な紫色のバラのスタンド花が置かれています。中に進むと音楽がかかっている、足元には赤色の長いカーペットが敷いてあり、まるで北島マヤ主演の劇場に迷い込んだ気分になります。カーペットが誘う壁面には、マンガに出てくる名言がちりばめられていて、一気にガラスの仮面の世界に引き込まれます。

展示は第1話の最初の場面から始まります。カラーの原画が色鮮やかです。原画はストーリーに添って展示されていて、原画の吹き出しにはセリフの活字が貼り込まれているので、その場面を読むことができ、49巻分のエピソードをおさらいできたような感じです。

『ガラスの仮面』に多数登場する劇中劇のコーナーでは、「たけくらべ」や「石の微笑」「奇跡の人」など、劇ごとに見せ場のシーンを楽しみ、主人公のマヤやライバルの姫川亜弓の成長も感じられます。美内さんのメッセージ

